

岩屋通信 第六号

昨年は年も押し迫った十二月末にインドネシアを中心とするインド洋沿海州で発生した未曾有の大地震は世界をまさに震撼させました。

思わず、日々素晴らしい仲間たちと合気万生道を通じて触れ合える幸福を感じる今日この頃です。

間もなく長崎道場の発足以来万四〇周年の記念演武大会が来る四月二四日(日)長崎市民会館の文化ホールで午後十二時三十分から開催されます。

長崎道場は、我が長崎北道場が平成十四年七月にスタートした時に先輩道場としていろいろお世話になったいわば兄貴格の道場ですので、北道場の会員もできるだけ見物に行ってください。

当日の北道場の夕方の稽古は休みにする予定ですが、市民会館に見物に行った方は

出席扱いとなるよう検討中です。

間近で高段者らの迫力ある演武は見る機会がないので、この機会に入場無料です。この機会に入場無料です。是非お出かけ下さい。

去る、三月二七日(日曜日)稽古の後、道場での総会には多数出席していただき熱心な議論ありがとうございました。

全員の御賛同をいただきまして、新年度となる四月より月会費、一般は四千元、少年少女三千円、幼年部二千元とさせていただきます。

出費多難な折で恐縮ですが、会の維持運営上よろしく協力をお願いいたします。

なお、値上げを機に役員一同これまでにも増して会員の指導育成に取り組んでまいります。

今月号は、北道場でも特に海外経験豊富な小島さんと衛藤さんから寄稿していただいておりますので、掲載させていただきます。

なお、衛藤さんご夫妻はこの六号が発刊される頃は遠く豪州の方で現地の熱心な仲間と合気道に励んでいることと思います。それと両氏分とも昨春秋に執筆していただいた原稿ですので、当時のつもりでお読み願います。編集者の発刊遅れですみません

*ドイツ、チェコスロヴァ、ハンガリー4ヶ国への旅
小島 勝一

「合気道」に入りもう一年経とうとしている。皆さんとも顔見知りになり、楽しい人間関係もでき、練習に熱心な時期に膝関節を痛めてしまい大変迷惑をおかけしている。その上、練習時にはいろいろ気遣いをしていただき有り難く思っている。

膝の休養を兼ねて今回中央ヨーロッパの四カ国(ドイツ、チェコスロヴァ、ハンガリー)へ旅行に行った。今までは放浪の旅を見ながらワイフと二人で旅を振り返っている。このうちハンガリーへは20年程前に文部省の「教育視察」で訪れた。この時は観光と

言うより高等教育の場で施設設備やどんな教育が行われているのを見るのが主体だった。その時は裏方の仕事で忙しく観光どころではなかった。今回は自分のためのおんびりと観光を楽しもうと出かけた。

これら四カ国は隣接している。各国間の移動手段はバスだったが、最長のドライブはチェコのプラハからオーストリアのザルツブルグまでの430kmという長いものだった。でも車窓からの眺めは素晴らしい。日本とは違った風景を楽しむことができた。どの国にも共通した風景は森林、林畑以外の土地は、綺麗に整地されており、私の眼には芝生を植えているように見えた。窓からの一瞬の情景だったが、綺麗な雫が数十羽で歩き回って遊んでいるのが見えた。

出入国時のパスポートのチェックは、バス移動だったので思ったより簡単だった。また、国を変わるたびに貨幣の両替をしたが全てスムーズにできた。ちなみに、お金の単位はドイツ(オーストリアは十口)37円、チェコは「ルナ」(4円)、ハンガリーは「フォリント」5円)であった。外国旅行でレイトを考えると、買い物をするの

はいつものとだけと楽しかった。

ドイツではまず、残されているベルリンの壁を見た。想像していたものとは異なり、意外に小さく低く、これが騒がれた壁とは思われなかった。しかし壁の崩壊前は兵隊が銃を持ち、軍靴を履いて警備していたことを考えると、精神的に高かったのだと納得が行く。また、かの有名なベルリンの象徴のブランデンブルク門、第二次世界大戦時のポツダム会議、ポツダム宣言の行われた邸宅をベルリン郊外に見に行った。

チェコではプラハ城が素晴らしく、中でも聖ピート教会は100mもある塔を持ち、左右を飾るステンドグラスには目を見張った。衛兵の交替、カレル橋、また旧市庁舎の前の機械仕掛けの天文時計は1時間毎にミュージックが奏でられ、12の聖人の人形が回って行くのが見えた。モーツァルト記念館、チェコで最も美しいレンガ色瓦の映えるチェスキークルムロフ城から見るオレシジ色の街屋根等素晴らしいものはかりであった。この城の裏手の庭園池で、二人の子ど

もが釣りをしていた。どんな魚が釣れるのか尋ねたら「これが釣れる」と見せてくれたのは、なんと「コルナ硬貨」だった。糸に磁石を結んで硬貨をつり上げていたのだ。ワイフと二人それを見て腹から笑い、思わずシャッターを切った。

オーストリアではウイーンにある世界遺産のシェーンブルン宮殿が記憶に残る。「ここは幼いモーツァルトがマリー・アントワネットに求婚したという逸話の残る「鏡の間」をはじめ、1400もの部屋がある。ザルツブルグではモーツァルトの生家や映画「サウンド・オブ・ミュージック」の「ドレミ」の歌で有名なミラベル宮殿の庭園などを散策した。

ハンガリーの首都はブダペストで、ドナウ川を挟んで北側のブダと反対側のペストに分かれている。ブダの王宮、ドナウ川に架かっているくさり橋、国王たちの戴冠式が行われてきたマチャーシ教会、ペスト地区が一望できる漁夫の砦等多数のヒューポイントがある。代表的なみやげのカロ手ヤ刺繍の美しさは初めて見る人には強く印象に残るものだ。

夕方のドナウの川下りも国会議事堂、聖アンの教会等がライトアップされ大変美しい。ハンガリーの人々は自分たちを東洋人だと考えており、名前の書き順も日本と同じで、姓名の順で綴る。私を例にとれば KOJIMA KATSUICHI と綴るのである。また皮膚の色、身長、生活習慣等ここを見て東洋人と似たところはないが、赤ん坊が生まれたばかりの時は、東洋人と同じ尻に蒙古斑があるそうだ。

旅に出ている感じるのは、ことはの大切さである。事前に訪問国のことをばを調べて準備しておくと話しかけやすい。それらをふんだんに使って極力話しかけると、即座に笑みを浮かべて対応してくれる。「ハンガリーは、ありがと」が一番基本的なことばだと思ふ。努力して暗記しておく必要はない。メモを持って何度か話しかけている内に、滞在中に自然に覚えてしまうものだ。忘れたら次の機会にまた覚えればよい。要は人間とのつきあいの為の道具なのだ。さて、今回の旅は常々訪れたいと思っていた国々だった。

この4ヶ国は隣接のこともあり、歴史、宗教に根ざした風俗習慣等が似通った点が多数あるが、西ヨーロッパの国々とはまた違う雰囲気だった。一方日本は海を隔てられているため独自の文化があるにはあるが、東洋に位置していることもあり色々な点を近隣の韓国、中国と類似点も共有している。旅を物見遊山で終わらせず、このグローバル化の国際社会の中で、できるだけ外国に旅し、外国の文化や生活習慣等を理解し、その国の人々を知るための旅として生かしたいものである。

* 飛爺水の豪州便り

衛藤 健吾

北海道の皆さんお元気で。飛爺水夫婦のオーストラリア滞在中も通算で約5ヶ月になりました。こちらの生活や合気道について感じたことを書いてみます。「人生を如何にエンジョイするか、これがこちらの一般の人々の生活行動の基準になっていると思います。所得は日本より低いはずですが、彼らの暮らしぶりを見てみると逆に見えてきま

す。

去る土曜日に、こちらの道場のメンバーのロジャーにパーベキョーに誘われ、夫婦で自宅に行った時のことです。私たちが最初に着いたのですが、まず住まいの違いに驚きました。家は日本より小さいくらいですが、前庭がありそこにパーベキョーの準備がされていました。裏に回ると芝生の庭に大きな木が何本も茂り、まさに公園です。敷地は150坪くらいあり、これがこちらでは普通の住まいだということです。

しばらくすると顔見知りの道場の他のメンバーもやってきました。聞けば今日のパーベキョーはロジャーの36歳の誕生日会とのこと。私たちはこの時まで何の集い知りませんでした。独身者を除いてはみんな夫婦同伴、子供連れで訪れ、総勢15人ほどになりました。メンバーの家族同士も日頃からの付き合いがあるように親

しげに話し始め、家族の方々も私たちに親しく話しかけてくれます。特別な料理があるわけでもなく、気軽に楽しく4時間ほど過ごしましたが、この雰囲気は本当にいいなと感じました。合気道をすることを家族が本当に理解し、応援していなければ家族ぐるみの付き合いなどできるはずがありません。北海道では一部の会員では家族を含めた付き合いもあります。まだまだです。家族の理解が足りないので、理解をしてもらえるだけの努力が足りないのか、あるいはそのような機会が足りないのか。いずれにしても折角の人生、合気道の縁を活かしてみんなで楽しもうではありませんか。私たちがこちらにいる間に家族の皆さんで遊びに来てください。人生の見方がきっと変わりますよ。

